

# 三枚のうろこ（番田）

今は堀から江石見守ちゆう殿さまがおさめて  
程前の戦国時代、この辺

この殿さまは笛吹くのが樂しみで、晚になると外に出ては吹いていたんやと。

その笛の音は、家来らも村のもんも思わず聞き入つてまうほど上手やつたんやわ殿さまがいつも笛吹きながら通る池のそばに柳の木があつての。ある晩のこと

柳の下で笛を

「この辺りにこんな美しい娘がいたのか。」と殿さまはび  
人がそばにきたんやつて。



つくりして、さっそくお城で働いてもらうことにしたんやと。

このべっぴんの女の人は気立てが良うて働き者やつたで、殿さまにひど気に入られたんやわ。ほんで、おそばで暮らすようになつてのお。

ある日、この女の人は、「今日から二十一日間<sup>のぞ</sup>は、どんなことがあつても私の部屋を覗かんください。」と殿さまに言うたんやと。

れた通りにしてたんやけど、だんだんと心配になつて、二十日目にそつと部屋を覗いてもたんやつて。ほしたら部屋ん中に



べつぴんの女の人はえんかつたんや。かわりにでつけえ蛇が赤ん坊を抱っこして、体中をぺろぺろ舐めてたんやがの。

「アツ」、殿さまは思わず声を立ててもたんやわ。その声に殿さまの方を見た大蛇は、目に涙を浮かべながら雨戸を突き破って、竹田川に飛び込んでしまったんや。殿さまは逃げる大蛇の後ろから大声で、「たとえ蛇でもわしの子を産んだんじや。ここに居よ。」と叫んだけど行つてもたんやと。

ヘビは玉の江の村まで泳いで橋の上で一息ついて、殿さまのいるお城の方を眺めで見て言ふたんやわ。

「お殿さま、いとおしゆうございます。ほやけど姿を見られてもたら、もう一緒にお暮らされません。お世話んなつたお礼に、これからは大水が出ても、わたしがお守りします。」

ヘビは、も一回水の中に入つて二度と

出て来んかったんやと。

あとに残された赤ん坊を抱きあげた殿さまは、脇の下にうろこが三枚あるのに気が付いたんや。大蛇が舐めるのを途中でやめたもんやで、うろこを落としきれんと残つてもたんやろの。ほんで堀江家の男の子には代々、脇の下に三枚のうろこのようなあざがあるんやと。

ほれから、大蛇をもつけのう思た殿さまは、お寺を建てて偉いお坊さんにしてもろて供養したんやわ。これが中番の龍雲寺の始まりなんやざ。

